

中期計画等実施経費による研究プロジェクト報告書

(平成25年度)

札幌校 附属札幌小学校 ふじのめ学級
札幌校 特別支援教育専攻 千賀愛

「大学附属特別支援学校・学級における支援方法に関する実践的研究」

1. 概要

平成24年度に引き続き、発達障害や知的障害のある子どもの教育支援に関するカリキュラム・教材開発、本州の大学附属特別支援校・学級の授業研究や地域支援の方法に関する実践的な研究に取り組んだ。

11月29日(金)のふじのめ学級研究大会において研究授業を公開し、特別支援学校・学級の関係者が参加して意見交流を行った。この研究大会は、教育実習の事後指導として2年次の特別支援専攻生が参加し、実践的な知見を深める機会ともなっている。また国内調査として茨城大学教育学部附属特別支援学校で開催された公開研究会に参加し、主に知的な障がいのある子どもの支援方法に関する授業見学や意見交流を行ない、分科会では札幌校のふじのめ学級において行っている授業研究の内容の一部を紹介した。

2. 研究大会の開催

11月29日(金)には、平成25年度全道教育研究大会「子どもに喜びのある自立を目指して」を開催し、全道から117名の参加者と57名の学生が参加、授業公開には特別支援教育の学部生も多数スタッフとして参加した。研究概要の説明を全体で説明した後、第一次授業公開では、小学校・図画工作「カラフル はあもにい♪」および中学校・保健体育「こんなときどうする?～ストレスとその対処～」、第二次授業公開では、小学校・体育「ちからいっぱい!ちからをあわせて!」および中学校・外国語「知ってる? Foreign countries」が行われた。その後、授業者との交流タイムとポスター発表を経て、小学校と中学校に分かれて分科会が行われた。参加者は小学校・中学校(特別支援学級を含む)のみならず、札幌市内の特別支援学校の教員、各教育センター(指導主事・研究員)など多様であり、活発な議論が行われた。詳細については、添付資料(研究紀要第43集)に示した。

添付資料: 研究紀要<第43集>「子どもに喜びのある自立を目指して」2013年11月北海道教育大学附属札幌小学校・中学校 特別支援学級(ふじのめ学級)

3. 国内調査の内容

① 訪問先

茨城大学教育学部附属特別支援学校
(茨城県ひたちなか市津田1955)

② 調査日程と訪問者

日 時: 平成25年12月10日(火)

訪問者: 松田岳大(附属札幌小学校特別支援学級)
田外真也(附属札幌中学校特別支援学級)

③ 調査内容

平成25年度茨城大学教育学部附属特別支援学校公開研究会へ参加し、小・中・高等部の公開授業を参観した。また、小学部・中学部の分科会に参加した後、茨城大学附属特別支援学校、京都教育大学附属特別支援学校、金沢大学附属特別支援学校、附属札幌小中学校とで、各学校における現在の取り組みについての意見交換を行った。

小学部では、学部研究テーマを「体育における感じる・考える・伝える授業づくり」と設定して、「体づくり運動」の運動領域から授業づくりを行っていた。小学部児童17名で行う体育の授業の中で、児童の「やってみたい」という気持ちと、動きの「気づき」を感じる授業づくりとなっていた。

中学部では、学部研究テーマを「総合的な学習の時間における感じる・考える・伝える授業づくり」と設定して授業づくりを行っていた。中学部生徒18名で行う総合的な学習の時間の授業の中で、シャボン玉を作る活動を通して、一人一人の“感じる”を大切にする授業づくりがされていた。さらに“感じる”を基盤として、その経験を積み重ねることで、「一緒にやりたい」「誰かに伝えたい」という思いにつながられることがねらいとされていた。

小学部児童、中学部生徒に共通する実態として、元気に学校生活を送っており、保護者や教師に言われたことについては忠実に行動したり返答したりする一方、自分で考え判断して動いたり、自分から意志を伝えたりすることが苦手であるという課題があるとのことであった。新学習指導要領においては「言語活動の充実」が明記され、思考力・判断力・表現力等を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことの重要性が述べられている。そこで、茨城大学教育学部附属特別支援学校では「感じる・考える・伝え合う授業づくり」を研究主題に設定し、1年次である今年度は、児童生徒が様々なことを感じ、自ら考え、伝え合うことができる授業の在り方の検討を行っていた。

各附属学校の交流では、今年度各校で取り組んでいる研究内容について意見交換を行った。ここ数年、キャリア教育などの視点から研究を進めてきたが、最近では児童生徒のよさを生かした授業の在り方という視点で新たな研究を進めているという共通点が見られた。本学級においても、「子どもに喜びのある自立を目指して」という研究テーマのもと研究を進めており、その実践内容について紹介させていただくことができた。